

## 佳作

## テーマ…誰かのために、わたしができること 「誰かのために、未来の私がやりたいこと」

東京都・明治学院高等学校3年 齊藤友一郎

私の夢は、小児科医になり、やがてマーシーシップスをはじめ、海外でも医療奉仕を行うことです。小児科医不足のため、隣国中国で、朝四時から診察予約に並ぶ光景は、日本ではあり得ないことです。初めて選挙に参加した十八歳として、医療は、政治経済と密接な関係にあり、日本の高い医療技術や医薬品は、経済発展にも寄与できると感じました。

私は今、ローマ字を考案したヘボン先生が作られた高校で学んでいます。ヘボン先生は医療宣教師です。ただ、医師として、横浜で医療奉仕をされたことはあまり知られていません。私の心に、ヘボン先生が日本に尽くしてくれたことを、今度は、私が世界にお返ししたいという気持ちが生ええました。

同時期、学校でがん患者として講演活動を行っている山下弘子さんのお話を聞きました。講演後、私の「どのような医師であってほしいと望みますか？」という質問に、「最後まで寄り添ってくれる医師であってほしい」と、山下さんは答えられました。山下さんから何よりも私が学んだことは、「医療者は、人の幸福をジャッジしてはいけない」ということです。少なくとも山下さんは、私には健康な人以上に輝き、幸せに生きているように見えました。また「最後まで寄り添う」とはどういうことなのかについても考えてみました。今の私の答えは、いつも未来と一緒に悩み、挑戦し考えてあげることだと思っています。

残念ながら、この夏、私のできることは受験勉強を頑張ることです。ただ、さまざまな立場に置かれている子どもを理解できるように、最後まで生徒会やクラブ活動は続けました。ハンディキャップを持つ子どもにも音楽を教えている母は、観察力と積み重ねた経験による直感が指導の土台になっていると言います。合格を得られたなら、入学ま

での間、子どもを知ることには全力投球したいです。治療のために上京する子どもと家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス」や「ぶどうのいえ」また、院内学級や健常児とダウン症の子どもと一緒に学ぶ保育クラス、小児がんの子どものためのキャンプなどに、ボランティアとしてぜひ参加したいと考えています。

すべての親にとって、子どもの病気は思いも寄らぬことです。私が病気の時、父母の心配は半端ではありません。小児科医はその気持ちをも責任を持って引き受けなければなりません。経過によっては恨まれる宿命を背負います。さらに、病気の子どもだけでなく、周りの家族の様子にも配慮しなければなりません。「ぶどうのいえ」を訪問した際、牧師さんの「会社員のような人はまだしも、農業や畜産業に携わっている人は、何日も留守にというわけにはいけませんよ。その往復に必要な交通費。心配しています」というお話に、こういう現況を改善していくことも役割ではないかと感じました。

私の身近に、高い知能のため、治療も必要であったであろう「コミュニケーション能力に誰にも気づいてもらえず、いじめをはじめ、孤独のなかで、底なし沼のような不安を乗り越えた人がいます。その人は「私は、まるでピノキオが人間になっていく過程のようだった」と言います。隠れている重い病気を見逃さないことも役割です。

医師や医学は万能ではありません。小児科医は、病に苦しむ子どもに、時には、さらに痛いことを強いる人です。でも、子どもの心に希望を灯せる人です。私の学校の校庭で行われるクリスマスツリーの点火式のように。

世界には、クリスマススを病気で迎える子どもがたくさんいます。私は、病気になってしまったことがトラウマになるのではなく、その子どもにとつて、良い経験になるように願い、一緒にクリスマスを迎えたいと思います。その時、ヘボン先生の生き方「Do for Others!」を思い出しながら。